



十 シクラメン星人の恋（太陽）

待っていた。今日も待っていた。あの人が来るのを。あたしは待つことしかできないのだ。

そんなあたしの期待の気持ちに気づいたのか、あの人はあたしに近づき、体全体の匂いを嗅ぐと、「おはよう」とおだやかな声で話掛け、花びらにやさしくキスをする。耳たぶのように、葉をもむこともある。かゆいし、気恥かしい。血行がよくなったのか（もちろん、そんな理由ではない。興奮したのだが、そんなことは恥ずかしくて言葉に出せない）、あたしは顔がほてり、身もだえする。そんな様子を見て、あの人はわたしとより一層心と体が近づいたことを確信しらのか、首を大きく頷かせる。それが、これまでのあの人があたしに見せる態度だった

もう。咲かないんだ。

あの人の急に冷たい言葉。吐き捨てるような言葉。感情のない言葉。

そう、あたしは、花がしおれ、葉は緑色から茶色に変色へ向かおうとしている。あの人の目の中に飛び込んでいったはずのあたしの輝きはどこへ消えたのか。老化。これはあたしのお意思ではどうにもならない。生きるもの全ての宿命なのだ。

だが、あの人にとってはそんなことは考慮の余地がない。自分の目に見えるあたしがあたしなのだ。あたしにピンク色の花びらと盛り上がる葉を求めていたのだ。だが、求めていたものが、あたしの魅力がなくなったからには、あのひとにとって、あたしはゴミよりも疎ましい存在となる。

がちやん。

きやあ。

あたしは居間の窓から庭の片隅に放り出された。鉢が割れる。あたしの下半身の根が剥き出しになった。恥ずかしい。これまで土の中に隠し、あのひとにももちろんのこと、誰にも見せなかった、は・だ・かの根。それが、今、太陽の光の下、ひげの一本、一本までが克明に晒されている。

いや、今は、恥ずかしいを通り過ぎて情けない気持ちでいっぱいだ。だけど、自分ではどうにもできない。あたしは動けない体なのだ。莖を伸ばし、葉を広げ、花を咲かせる生物なのだ。ちゃんと、動いていたはずだ。それなのに、一旦、鉢から投げ出されると、自分の意思で自分の根も

隠せないとはどういうことなのだろうか。それは、生物として正しいあり方なのか。なぜ、そういう生き方しか選ばなかった、選べなかったのか。

誰か、毛布を。誰か、服を。いや、誰かじゃない。あの人だ。こうなったのも、あの人のおかげだ。あの人にあたしの下半身を隠す何かを持ってきて欲しい。今まで、毎日のように、水遣りやあいさつなど、愛情を掛けていてくれていたんじゃないか。ハンカチぐらい掛けてくれたっていいじゃないか。それなのに、この仕打ちは何なのだ。あの愛を交わした時間は、瞬間は、一体、何だったのだろうか。最後の別れは、最後の仕打ちは、こういうことなのか。

あたしはしなびていく。枯れていく。

まずは、下半身の根っこ。土の中の水分を一滴も逃さないように、鉢の中に地球一周分ほどの長さの根を張り巡らした。それだけでは飽き足らず、鉢の外の世界からも新たに水分を吸収する場所を探そうと、鉢の強固な壁を執拗に何回でも根の先で突き、執念の二文字で、恩讐の彼方の五文字で、幽かな光を見出そうとした、あの不撓不屈の肉体と精神を持っていたはずの根が、今はいきいきとした面影が消え、根元のほうにちじんでいく。成長の反対は、まさに収縮なのだ。

そして、お別れの言葉もないまま、離れた。切れた。ああ。そこには、感嘆符しかない。

次は、あたしの顔というべき花びら。あたしをあたし足る存在としていたが花であり、花びらなのだ。だが、それも、根からの水分や養分が吸収できなくなった瞬間から、大きなお荷物以外の存在でしかなくなる。そう、今となっては余計なものなのだ。大きな顔していたくせに、その反動からか余計に小さくしぼんでいく。

それを象徴するかのように、お荷物に耐えきれなくなったのか、茎は花びらへの水分を遮断し、その結果、あの鮮やかだったピンク色が雨の日に靴で踏みにじられた地面の土のような泥色に浸食されていく。そして、花びらは一枚、一枚と散っていく。こんな汚いものはいらぬ、と愛相をつかさねたのだ。

いや、愛相をつかさねたのは、反対に、あたしの方だ。あの人から愛されるために、これまで命をつないできたはずの根や花びらが、見るも無残にあたしから去っていく。もちろん、根も花びらもあたしから離れても、そこには未来はない。あたしたちは運命共同体なのだ。その共同体の主体たる根と花びらは、収縮して、ちじこまり、地面色になり、水分を失い、こなごなに散っていく。そこに存在したことさえもなかったかのように。

最後の碧だった葉も、以前は、太陽からの光を浴びて栄養素を生み出したはずなのに、根が立ち去ってしまうと、今度は、太陽からの光が、かえって存在を破壊して、枯れさせていく。

味方だったはずの、後見人だったはず太陽の光が、それこそ、庭に体ごと転がると、一転して、敵に、尖兵隊として襲い掛かって来る。光に愛撫され続けた葉は、今度は光に鞭打ちの刑を受けたのか、歯が抜けていくように、あたしから離れていく。

いかないで。いかないで。どこへいくというの。離れて行った根も花びらも最後がどうなったか知っているでしょう？だけど、あたしがいくら葉に泣きついても、葉は一枚、また、一枚と縁を切る。

これまでも、時間を掛けて、芽を伸ばし、主茎を伸ばし、葉を広げ、さらに枝茎を伸ばし、やっと大輪の花を咲かせることで、二等辺三角形の黄金比率の形になったにも関わらず、オリーブの木の根元に捨てられた瞬間に、花びらは散り、葉は色をなくし、茎は棒のごとき精神を失ない、折れ曲がった。そう。花は、葉は、茎は、根と同じようにあたしを支えてくれていたのだ。そのことが、今、ようやく思い知った。当たり前なのが当たり前とっていなかったのだ。

遅いか。遅過ぎるか。それでもいい。あたしは、あ・り・が・と・う・とゆっくりと鏡の前で口を動かすように、花や葉、茎にお礼の言葉を告げた。例え、花たちにこの感謝の言葉が届かなくてもいいのだ。あたしがそう思うことでいいのだ。

もうあの人への恨みは一切ない。ここまであたしが存在できたのも、生きてこられたのもあの人のおかげなのだから。醜い姿のまま部屋の片隅でいて、あの人の不快な視線を浴びて最後を迎えるよりも、あの人から遠く離れた場所でひっそりと消えていった方が心は休まる。

今は、あの人との楽しくもあり、懐かしい思い出を振り返りながら、土と化していく。土となることで、新たな生物の栄養素として、糧となるのだ。でも、あたしは輪廻転生を信じているわけではない。あたしの存在はこれで終わる。生まれ変われるのではないかという安易な期待で、死からの恐怖を逃れようとは思っていない。死は死でしかない。だけど、あたしは生まれてよかった。あの人を愛せてよかった。よかった、と思いたい。

こうしてシクラメン星人は土と同化して形を失い、生きていたという証拠も記憶も失った。一年後、陽射しが暖かさを増し、桜のつぼみが淡いピンクの羽を広げだした頃、大きく開かれたガラスの窓から、再び、しおれ、うなだれたシクラメンが鉢ごと、期待されていない虹のような放物線を描いて、オリーブの木の根元に落ちた。鉢が割れた。